

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前 11時40分～午後 1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

夢物語 〈全4話中の第2話〉

北佐久郡川西が輩出した俊傑二人

しゅんげつ
いぢず
～教育一途の人・五無齋と現代書道の父・天来～

立科町教育相談員 岩上起美男

立科小学校体育館に掲げられてある、現代書道の父、比田井天来先生(1872～1939) 揮毫の扁額「質実剛健」を仰ぎ見るとき、いつも必ず、この6月に誕生し、逝去された五無齋・保科百助先生(1868・6・8～1911・6・7)の面影が扁額に重なり合うように浮かび上がります。そして、五無齋先生と天来先生が、在りし日々を偲びながら、立科っ子の学びの姿を嬉しそうに見守っているような気がします。

しかしながら、北佐久郡の川西地方が輩出した二人の俊傑の交流や、この扁額の由来に関する史料も言い伝えも残っていません。そのため、これらの史実は分からないそうです。いや、分からないと言うよりも、両雄の交わりはなかったという見方が定説のようです。

この定説の背景には、「隣人」であるが故の微妙な関係があると思います。

座右の書(?)である「悪魔の辞典」(ピアス著・西川正身編訳・岩波書店)に、隣人とは、「私たちのほうでは、命令に従って、自分を愛するように愛しようとしているのに、あらゆる手を尽くしてその命令に背かせようとする人。」と記述されています。この関係は、「隣人」としての隣人である私にも共通します。今日、立科町と佐久市望月はむろん共

存共栄の関係にあります。中山道の宿場町として栄えた時代は、このような微妙な関係がはつきりしていたはずですが。

望月宿に泊まった旅人は、よほどの事情がない限り、茂田井間の宿や芦田宿には泊まらず、逆も同様であり、近隣の宿場は言わば商売敵であったからです。

隣人間の微妙な関係は、町誌からもうかがえます。「立科町誌 歴史編(下)」に、「昭和22年、新しい高校制度の発足に伴い、川西地方各村は、『新制高等学校陳情書』を県に提出し、学校組合立である蓼科農学校、望月高等女学校、望月中学校を県立高校に移管すべく、『川西高等学校』の設立に向けて、大きな運動を展開した。しかし、望月側との歩調の乱れなど複雑な経緯があつて、実現することなく終わり、昭和23年より立科三村による蓼科高等学校の設立の方向に転換した。」という記録が残っています。

これに対して、「望月町誌 第五巻 近現代編」には、望月中学校が3年前に落成したばかりで、財政面も非常に厳しい状況にあつたことが記されています。

このような歩調の乱れは、隣接する市町村には十分あり得ることで、両雄の関係においても、複雑な経緯があつたのではないのでしょうか。

さらに、五無齋先生を変人奇人と決めつけ、天来先生を看板屋と称してはばか

らない人々の存在も、二人の交わりに関する史料や言い伝えが残っていない背景にあるのかも知れません。

いずれにしても、同じ北佐久郡川西に生まれ、同じ時代を颯爽と駆け抜けた二人の俊傑が、互いの存在を全く知らなかった、そして、一度も意識し合うことがなかったと考えるのは、不自然極まりないことです。

そこで、今月号も、老いの空想は夢物語の世界に飛んでいます……。

明治40年2月、長野県が生んだ初の大臣、渡辺正武子爵邸を訪れた翌朝、五無齋は、上京時の定宿、本郷「旭館」を発ち、自ら「火の車」と名付けた朱塗り金箔付きの荷車を牽き、牛込区岩戸町の比田井天来宅に向かった。

この派手やかな荷車は、五無齋が筆墨行商を生業とする決意をし、特別注文で造った。「火の車」には、今回の上京で、書道用品の老舗、玉川堂と古梅園から仕入れた筆や硯、墨、短冊などがずっしり積まれていたが、五無齋の頑健な体軀はこれを軽々と牽いた。

重い荷車を足早に牽きながら、五無齋は、初めて対面する天来への思いを反芻していた。

明治元年に五無齋が生まれた北佐久郡